

聴覚障害学生のいない中小規模大学における 情報保障支援の維持と整備

和歌山大学 キャンパスライフ・健康支援センター 小馬加奈子

背景・目的

本学は全学生4500名程度、4学部1学環を有する中規模大学である。支援部署設立(2014年)以降、情報保障の利用を必要とする学生は在籍していない。いざ支援が必要になった際に迅速かつ適切に対応するためには、教職員や大学自体が「備え」を維持し続けることが不可欠である。
本発表では、①教育的要素としてのサポーター学生養成、②即応性・安定性を担保する学外資源の活用と連携、③文化の醸成を目的とした学内への働きかけ、という三つの観点から情報保障体制維持の実践を紹介し、その課題を検討する。

サポーター 学生養成

- 情報保障に限らずに、通年での募集を行っている。(現在13名)
- ・サポーター学生に対する情報保障導入講座
基礎的な知識の導入／音声認識活用の紹介。
- ・継続的なテイク研修
2024年度は1名(週1、6回)実践レベルまでの向上を目的。
- ・他大学と連携した研修会
2024年度は1度開催(オンライン)
- ・オープンキャンパスでのサポーター学生による情報保障活躍の機会を作り、自信やモチベーションの向上につながる。

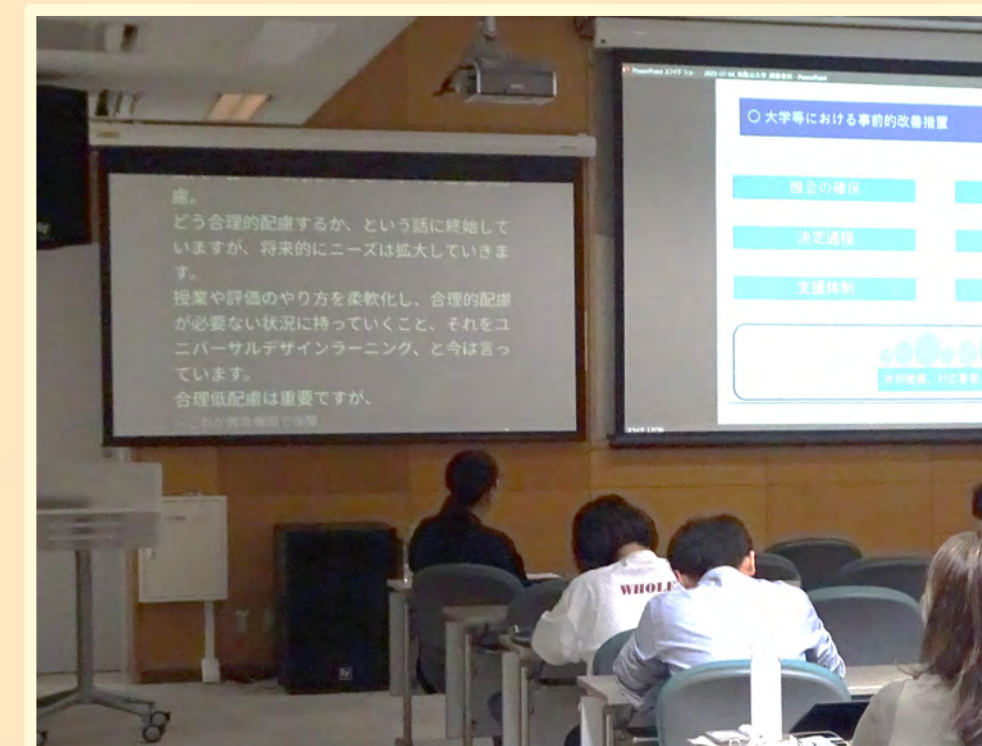
学外資源の 活用・連携

- ・情報保障企業／団体の活用
年に1度の利用(FD／SD)利用実績の積み上げになる。
- ・学内支援担当者の変更の後も支援できる状況を担保する。
本学での主な担当が1名のため、担当者の変更で大きな影響が出る可能性がある。
- ・PEPNet-Japan準会員への参加
研修への参加。
相談箇所の確保。



学内への 働きかけ

- ・全学FD／SD研修への文字情報保障の導入
利用希望はなくても、すべての参加者が利用可能。
「理解の助けになった」と感想。
- ・教職員の情報保障体験
複雑ではない・負担も少ないという実感につながった。
- ・支援機器の整備
ロジャー/iPad/スタンド等
予算に余裕がある時に購入する。



本学の取り組み

課題

今後の展望

- ・活動機会が少なく、モチベーションが保てない／参加学生が少ない。
- ・実践的な指導ができるスタッフが必要。

- ・費用面での負担が大きいため、通常授業での導入は困難である。(本学学生謝金 1000円／時間)
- ・地域団体との関係の弱さ。

- ・不在なことで「今は不要」と判断されやすい。
- ・未知の支援に対しての教職員の心理的ハードルの高さ。
- ・機器の点検／管理の不十分さ。

- ・学内での活躍機会を増やす
入学式／卒業式／オープンキャンパス／支援部署関連の授業／FD/SD等
- ・聴覚障害学生以外にも役立つ支援であることのフィードバック。
- ・サポーターとしての活動が、大学卒業後も生きる経験となることを意識させる。

- ・今関係のある団体だけではなく、複数団体とのルートを確保する。
- ・引き続き、定期的に学外団体の利用を続け、利用実績やノウハウを蓄積し、必要な際には迅速な依頼を行えるようにする、
- ・他大学との関係合同研修や模擬演習を行い、実践機会の確保につなげる。

- ・支援機器活用方法の作成／共有。
- ・教職員を対象とした、支援機器／情報保障体験イベントを開催し、実感に繋げる。
- ・提供義務が教員一人ひとりにも課せられているという啓発。
- ・情報保障の利用を年次行事化し、利用学生の有無に関わらず継続。
- ・授業改善や全学生への授業支援に応用する。

考察・結論

- ・情報保障体制は「学生のため」だけではなく、大学や教職員が安心して教育に臨むための基盤でもある。
- ・維持することが組織の学習につながり、次の学生受け入れに直結する。利用学生がいない大学こそ、支援体制を持ち続ける意義を再考する必要がある。
- ・支援部署が中心になりつつ、大学全体に浸透させる仕組みづくりが重要である。
- ・特に中小規模大学の場合、担当者の変更での影響は少なくないと予想されるため、できるだけ単純かつ普遍的な方法を取ることを意識する。

問い合わせ先

和歌山大学 キャンパスライフ・健康支援センター
小馬加奈子(コーディネーター)
Tel/ 073-457-7155 Mail/ shien@ml.Wakayama-u.ac.jp



和歌山大学 WAKAYAMA UNIVERSITY
キャンパスライフ・健康支援センター
HEALTH & COUNSELING CENTER